

なかま すく トリー、仲間を 救う

ヤマアラシのトリーは、体中、すどいトゲで おおわれています。茶色い小顔に、茶色い鼻、小さな目も茶色です。トリーには兄弟が いなかったので、さびしく思うことがよくありました。お父さんと お母さんも、食べ物さがしに いそがしくて、あまりトリーと いっしょに遊んであげる時間がありません。ある日のことです。はげしい雨が 何日も 降り続いたので、トリーの家族は、水びたしになった巣穴を出て、新しい巣穴をさがしに行かなければならなくなりました。

しばらく歩いて行くと、森の中でも初めての場所に 来ました。とてもきれいな所です。リスやウサギや鳥など、いろいろな動物の家族が かけ回っているのが 見えます。

「ねえ、お父さん。ここにいても いい？」と、トリーが たずねました。

「もし いい巣穴が 見つかったら、ここに 住んでも いいだろう。」

「うわーい！」 トリーは、ほかの動物たちと 友だちに なりたかったのです。



つぎのひ、トリーの お父さんは、トリーに 森の中を たんけんしに 行って いいと 言いました。「だが、気を 付けるんだぞ。そして、あまり 遠くに 行っては いけないよ。」

トリーは、「はい」と 約束をして、いそいそと 出かけて 行きました。

トリーが 岩の 向こう側を 見ていると、ウサギが 近よって 来ました。「こんにちは。君の 名前は？」 ウサギが たずねました。

「ほくは、トリー。この 森に 引っこして 来たばかりなんだ。君の 名前は？」

「ダスティーだよ。毛の 色が 灰色だから、お父さんと お母さんが そう 名付けたんだ。ね？」 ウサギは 一回りして、灰色の 体を見せました。まもなく、ほかの 動物たちも やって 来ました。

ダスティーは ほかの 動物たちに トリーを しょうがいしました。「この 子は、トリーだよ。こっちは 友だちの ジェッドと マイロ。」 そう 言って、近くに いた リスと コマドリを しょうがいしました。「そして、こっちは ほくの 妹、クレア。」

「こんにちは、トリー。」 クレアが あいさつしました。





しばらくたちましたが、トリーはなかなかみんなにとけこめないようでした。ほかの動物たちがトリーのとがったトゲのことをからがったりするのは、トゲでケガしそうだから、いっしょに遊ばないよと言われてたりもしました。

トリーは、とても悲しくなりました。ほかの動物たちと友達になりたいのに、ただ、クレアだけは、トリーをからかうのはやめなさいよと言って、ほかの動物たちからトリーをかばってくれました。クレアはトリーの話し相手になってくれたので、二人はすぐに仲良しになりました。

ある日のことです。トリーは、ダスティーとマイロとジェットとクレアがよく集まって遊ぶ、大きなどんぐりの木の下に行きました。そこには、ジェットの弟のセドと、たぬきのミルトンも来ていました。

「今日はここでは遊ばないよ。」と、セドがみんなに言いました。「お父さんとお母さんが、このどんぐりの木の実を集めに来るんだ。そこら中にどんぐりの実が落ちてくるよ。」

「トリーなら、だいじょうぶだね。」と、ジェットが言いました。「どんぐりが当たって、ちっともいたくないだろ。」

「意地悪はやめて。」 クレアがおこって言いました。

「いいんだよ。ほく、なれてるから。」 けれども、心の中ではトリーは悲しくなりました。(どうして、みんなはほくのことに好きじゃないんだろう?)

「行こうぜ。ほかに遊ぶ所、知ってるよ。」と、マイロが言いました。

マイロは、森のちがう所へみんなを案内しました。みんな、そこで遊びました。とても楽しかったので、ついつい時間のことをわすれ、日がくれようとしていることに気が付きませんでした。しばらくして、たいようがしずみかけていることにクリアが気がきました。

「おそくまで遊びすぎたわ! お父さんとお母さんが心配するわね。」

みんな、急いで帰り始めました。家の近くまで来たころ、ミルトンが言いました。「お母さんが言ってたんだけどね。夜には、大きな動物が出てくるんだって。」

「だいじょうぶだよ。それに…。」と、ダスティーが言いかけました。

「シーツ! 物音がする!」と、ジェットが言いました。みんながジェットの指差している方を見ると、大きな灰色のオオカミが立っています。みんな、あわてて走り始めました。



「こっちだよ！」 トリーが 急に さげびました。「どんぐりの 木は、こっちだよ。」

小さな 動物たちは、全速力で 走りました。けれども、オオカミの ほうが ずっと 速く 走っています。

「助けて！ 助けて！」 ダスティーと クレアと ミルトンが さげびました。

すると とつぜん、オオカミが 小さな 動物たちを 追いかけるのを 止めました。トリーが 間に 合って 入って来たのです。

「速く！ にげて！」 トリーが みんなに さげびました。

「だけど、トリーは どう するの？」 クレアが さげびました。

「いいから、にげて！」と、トリーが 言いました。

クリアと ほかの 動物たちは みんな、あわてて 近くの しげみや 見つけた 穴に にげこみました。

トリーは、そろそろと どんぐりの 木からはなれました。オオカミは、一体 この ヘんな 動物は 何だろうと 思って、つけて来ました。けれども、
ががんで トリーの 背中を がごと、キャンと 鳴いて、後ろへ 飛び下がりました！ トリーの するどい トゲの 何本かが オオカミの 鼻に
ささったのです。オオカミは おそれを なし、悲鳴を あげながら、にげて行きました。



「もう だいじょうぶだよ、みんな。出てきても だいじょうぶ! オオカミは いなくなつたから。」 トリーが みんなを よびました。

「あなたが わたしたちを 救ってくれたのね、トリー!」 クレアが うれしそうに 言いました。

家に 着くと、みんな、今日 起つた ことを お父さんと お母さんに 話しました。

「あなたが うちの 子たちを 救ってくれたのね!」 リスの セドと ジェットの お母さんが 言いました。「あなたは、英ゆうだね。」

ほかの 動物たちも みんな、トリーに 声えんを送りました。トリーの 両親は、ほこらしげに ほほえみました。

「君の トゲの ことを からかって、本当に ごめんよ、トリー。」 ジェットが うつむきながら 言いました。「君の トゲが、ほくたちを 救ってくれたんだものね!」

ダスティーと ほかの 動物たちも みんな、うなずきました。

「ううん、いいんだよ。気にしないで。」と、トリーが 言いました。

その 日からは、みんな、最高の 友だちになりました。

お
終
わ
り

